

序 論

- 先週は、シアトルの日本人教会合同による「婦人ランチョン」のスピーカーとしてお招きいただき、WJJCの礼拝を不在しましたが、二つのチャペルで、それぞれ「証し礼拝」をもって下さり、証しをして下さった方々、司会をして下さった方々に心から感謝します。
- 私も、木曜日にこちらを発ち、金曜日のランチョン、土曜日には「栄光教会」での「一日修養会」、更には、日曜日の「シアトル日本人長老教会」での礼拝で、それぞれメッセージのご奉仕の機会を頂き、月曜日の夜にDCに戻って参りました。
- この間、合間の時間に頂いた様々な観光とご接待に心から感謝すると共に、何よりも、クリスチャンとしての交わりに感謝をしたことです。
- その中でも、不思議な摂理の中で、凶らずも、長いところでは50年振り、37年振りにも及ぶ、多くの昔の友人・知人に10人近くも「再会」する機会に恵まれたことです。
- いずれにせよ、お祈りとご協力感謝します。
- さて、そのような理由で、先週は一回空いてしまいましたが、過去に2回にわたって、旧約聖書の人物「ダニエル」の生涯から学んできた。
- 特に、「世に生きるクリスチャン」と言うテーマのもとに、その友人たちをも含めたダニエルたちの「世に生きたクリスチャン／信仰者」の生き様を学んできた。
- ここでポイントは、「世に生きた」と言う点である。
- 聖書が「世」と言うとき、それは、私たちに、二つの意味をもっている。
 1. 一つは、「世」とは「そこから救い出されなければならないところ」とであると言う意味である。
 - (1)即ち、世は、神を畏れず、神を無視し、神を軽んじ、神を当てにしようとしめない世界である。
 - (2)クリスチャンとは、このようなスピリットをもって生きて来たことを、罪の人生であったと、悔い改め、イエス様の十字架による赦しを頂いたものである。
 - (3)即ち、クリスチャンにとって、世は離れるべきものである。
 2. しかし、もう一つは、クリスチャンにとって、世は、近づくべきものである。
 - (1)それは、正にイエス様がされたことである。
 - イエス様は、私たちに近づくために、私たちと同じ人間となって、この地上、世に来てくださった。
 - そして、私たちと同じように生きる痛みや苦しみ、また喜びも経験し、私たちに近づいてくださった。
 - しかも、聖人としてお高く止まっているのではなく、人々から罪人、遊女、取税人として、宗教人、道徳家から軽蔑されていた当時の「罪人」たちに近づいて多くの時を過ごした。
- 私たちクリスチャンは、世から救われた。同時に、今、私たちは、世の光、地の塩となるべく、世に遣わされているのである。
- ここで大切なことは、世から救われたクリスチャンが、世に遣わされている間に、いつの間にか世に染まり、世に妥協してしまってはならないということである。それゆえ
 1. ローマ12章2節でパウロは言う：「世と妥協して(調子を合わせて)はならない」と。
 2. ヘブル書の著者も言う。私たちの大祭司であるイエス様は、私たちと同じように世の生活を経験されたが、罪は犯されなかった。
- 更に、ヨハネは言う。「世に勝つ者はだれか。イエスを神の子と信じる者ではないか」と。即ち、
- クリスチャンとは、世から救い出され、世に遣わされ、同時に、その世に勝って生きることである。
- 私たちが、ダニエルたちから学ぶことは、正にこの点についてである。
 1. 彼らが、生きた社会は、異邦人、異教の社会であった。
 2. その中で、ダニエル達は今のクリスチャンたちに相当する信仰者たちであった。
 3. 彼らの周りは、自分たちの信仰のことなどまるで理解し、受け入れてくれない異教社会であった。
 4. しかも、王の側近として、彼らの生きた社会は、高位ではあったが、その異教性の最も強い場所であった。
 5. 彼らは、そこで、信仰者としての姿勢を貫き、勝利者としての証しを立てたのである。

- 私たちは、その実例を過去 2 回にわたって見てきた。それらは、世に生きる彼らが信仰者として試練に直面したときであった。私たちは、彼らが信仰者としてそれらにどのように対応したかを学んだ。
- 第一回目の時は、彼らは、神への信頼と服従をもって、試練を乗り越えた。第二回目は、献身と信頼であった。今日は、第三回目である。
- 今日の箇所、即ち、異教社会で自分の信仰を貫こうとするダニエルの前に立ちはだかった今回の事件について簡単にまとめたい。
 1. 時代は、既に移り、バビロニア帝国は、メディア・ペルシャ連合国に敗れ、ダニエルたちは、新しい王と帝国に仕える高官になっていた。
 2. 1-3 節によるなら、当時の国家の支配制度は、全国を 120 の領地に分け、それぞれに領主を立て、そのトップにダニエルを含んだ 3 人を立てた。
 3. 王は更に、その 3 人の中から、ダビデを選び、国の政治全体を彼に託したのである。
 4. 忘れてならないことは、彼は、奴隷として、この国に連れて来られた人物である。いくら優秀・有能だとしても、その彼が、今や、王に次ぐ、国の NO. 2 とは、大抜擢にもほどがある。と誰しもが思ったであろう。
 5. それは当然のように、彼の周囲にいた他の高級官僚の間に、ダニエルに対する妬みと憎しみを起こした。そして、それゆえに、彼らは、彼を失脚させようとした。
 6. 彼らは、彼の仕事上、社会上における生活の中に、彼を失脚させるような落ち度、欠点がないかを調べた。しかし、彼らは見いだせなかった。4 節
 7. そこで彼らは言った。「私たちは、彼の信仰のことで、王に訴えるしか方法がない」と。
 8. そして、彼らは王に「これから 30 日間は、王以外に誰にもお祈りをしてはならない。どんな神様にも祈ってはならない。お祈りをして良いのは、ただ王に対してだけである。もしその法令に背くなら、刑罰としてライオンの穴に投げ込まれる」と言う命令を全国に出させたのである。
 9. 王は、少し考えれば、それが、自分のお気に入りの部下であるダニエルを巻き込むことなることは分かるはずであった。しかし、おだてられて得意になっていた王は、見えなくなって、権威の見せびらかし、象徴として、この命令を出すことにうっかり同意した。
 10. 当然のように、ダニエルは王の命に背いた。言うまでもなく、彼を陥れようとしていた他の官僚たちは、即座にその現場の証拠を掴み、王に訴えた。
 11. 罠にはまると知った王は、後悔したが、ときすでに遅し。ダニエルを救う方法はないかと、色々考えるが、思い浮かばない。仕方なく、すべてをダニエルの信じ仕える神に託し、ダニエルをライオンの穴に投げ込む。
 12. その日、眠れぬ夜を過ごした王が、明け方を待つようにしてライオンの穴に行ったとき、彼は、そこに一つの怪我も、傷もなく守られていたダニエルを発見。
 13. 王は感動して、ダニエルの神を称え、礼拝するように全国民に呼びかけた。
- これが、起こったことのあらすじである。この出来事から、私たちは「世に生きるクリスチャン」の生き様として何を学ぶか？

本 論

Ⅰ. 第一は、私たちが生きる「世」という環境についてである。

A. 彼は、どんな生活環境の中に生きていたのか？

1. 彼の職場環境について、1-3 節は以下のように記す。「……」。
2. 彼は、敵に、競争相手に囲まれ、妬まれ、憎まれもした。
3. 勿論、そんなネガティブな関係だけではなかった。彼は、王様に寵愛されていたようである。1 章の出来事にも記されていたが、王室で働く他の係官やスタッフで、彼に好意を示す人も必ずあった。

B. しかし、ここで強調したいことは、人生における人間関係は複雑であり、色々な人、色々な場合があると言うことである。

1. イエス様は、弟子たちに言われた。「あなた方は、世にあっては艱難、悩みがある」と。
2. 確かに人生には悩みが一杯ある。
 - (1) 経済的な悩みがある。
 - (2) 肉体的悩みがある。
 - (3) それらは皆大きな悩みである。

- (4)しかし、「人間関係の悩み」は、現代、否いつの時代でも、その人が健康であれ、金持ちであれ、いつでも、多くの人々を苦しめ、ストレス、ディプレッスさせている。
- (5)そして、拳句の果てには、健康的にも、経済的にも、多くの人を破綻させている。
- (6)イエス様も、聖書が明確に記しているように、妬みから十字架に付けられた。イエス様の生きた環境も、憎しみ、妬みであった。
- (7)イエス様のような完全なお方でさえ、そうなら、ましてや、私たちのような罪深い、欠点だらけの私たちが、憎まれたり、妬まれたりするのとは当然である。(私も告白されたことがある。「先生を憎んでいました」「妬んでいました」と。)

C. それで、ダニエルが、また私たちが、生きている世である。

- (1)悪魔は更にそこに、宗教問題を利用し、からめてダニエルを陥れようとチャレンジして来た。
- (2)宗教問題は、しばしば、人間の罪(ここでは妬み、憎しみをカモフラージュするために利用される。たくさんの宗教戦争と呼ばれるものがそうである。だから宗教はアヘンだと言われる。
- (3)しかし、同時に、宗教・信仰こそが、神様こそが、神の愛こそが、否、神様の愛の具現としての十字架こそが、この罪とそこから発生する人間関係を解決する唯一の道である。

II. さて、それでは、最後に、この世に生きる信仰者としてダニエルが悪魔から受けた挑戦と試練にどのように答えたいかを見たい。

A. 私たちは、ここまでダニエルとその友人たちが、世に生きるクリスチャンとして、どんな状況下でも、

- 1. まず、彼らは、神に従ったこと、神への「服従」を学んだ。
 - (1)即ち、ダニエルたちは、1章で、異教の神々に捧げた王の食物を頂くことを強要された時、み言葉・聖書に従って、それを拒否する道を選んだ。
 - (2)それは、今で言うなら、聖書が言っていることにそのまま服従し、実行することである。
 - (3)確かに、聖書をすべて神の言葉と信じるなら、聖書が、「神様がしてくださると約束されたこと」は大いに、信じ期待し、それを経験する者でありたい。
 - (4)しかし、もしそうなら、同時に、聖書がするように命じていることも、いい加減にせず、実行するものでありたい。
 - (5)聖書も、み言葉を聞くだけのものではなく、み言葉に従い、行方者になるように言っている。マタイ7章24-27節、ヤコブ1章22-24節参照。
- 2. 次に、彼らは神にすべてを、命までも捧げた。即ち神に全的に「献身」したことを学んだ。
 - (1)これは、3章で、ダニエルの友人たちが、王の造った金の像を拜むことを拒んだときのことである。
 - (2)そのとき、彼らは、王からの刑罰として燃え盛る火の炉に投げ込まれ、焼き殺されることを覚悟していた。
 - (3)勿論、彼らは、神様が彼らをその火の炉からも奇跡をもって救い出せると言う神様の全能を信じていたが、それ以上に、
 - (4)彼らの関心は、神が自分のために何をするか、しないかよりも、自分の命までも含めて、自分の何もかもを神様に捧げることであった。それゆえ彼らは言った。
 - (5)「私たちは、私たちの仕え信じる神が、私たちをあなたの手から、火の炉から救い出せると信じている。しかし、たとえそうでなくても、私たちは金の像を拜みません」と。
 - (6)「たとえそうでなくても」、即ち、「どうなっても」「生きても、死んでも」と神様にすべてを捧げ、任せている姿である。

B. さて、それでは、今日の聖書箇所、この6章で、ダニエルは、「王だけに祈れ。でなければ、ライオンの穴に放り込むぞ」と驚かされた時、それにどのように対応したのかを学びたい。

- 1. 一言で言うなら、それは「誠実」である。
- 2. 「誠実」とは、一言で言うなら、変わらないことである。たとえ事情や、環境が変わっても、変わらないことである。
- 3. 「誠実」は、人間関係、神と人間の間の中、最も大切なことである。
 - (1)それこそが、正に結婚の時の誓約に表されていることである。即ち「病める時も健やかなるときも、貧しいときも富めるときも、・・・堅く節操を守ることが誓うか」である。

(2) 誠実こそが、愛の試金石であり、愛のすべてである。

4. 聖書も：

(1) 「聖徒」の姿について「損になっても立てた誓いは変えない」(詩篇 15 篇 4 節)と言う。

(2) イエス様の素晴らしさを表して、ヘブル書の記者は、イエス様についてこのように言う。

「イエス・キリストは、昨日も、今日も、いつまでも同じです(以前の訳では「変わらない」)」(ヘブル 13 章 8 節)。

5. 私たちを育ててくれた霊的な恩師は、しばしば私たちにこのように言った。「信仰生活で一番大切なことは、目立つ何かすることではなく、変わらないことである」と。

6. 6 章における今回の出来事におけるダニエルの誠実さは、10 節に一番よく表されている。

「・・・」。そこには：

(1) ダニエルが、王の祈禱に関する命令が出たことを知って家に戻ったこと

(2) 彼が、部屋の窓がエルサレムに向かって開いていることを知っていた(イスラエル人は、いつもそのように窓を開いて、神様の臨在を象徴するエルサレムに向かって祈る習慣があった)こと

(3) しかも、彼は、神への畏敬と謙虚さを明確に表すために、跪いて祈ったこと

(4) 更には、彼はいつものように 1 日 3 回祈ったこと

(5) いやいや、しぶしぶでも、そそくさと義務的にでもなく、むしろ、「感謝」をもって祈ったことが記されている。

7. これらの描写の中で、最も大切なことは、日本語では、「いつものように」という言葉である(英訳：as he had done before)。

(1) ダニエルは、王の命令で、神への祈りが禁じられ、しかも違反は死刑を意味していることが明らかになるという危機に瀕したときも、

(2) 「いつものように」「いつもと同じように」「いつもと変わらずに」

(3) 窓を開いて、跪いて、しかも、ご丁寧に、いつもと変わらず、日に 3 回、そして、この非常事態にも泣きごとや、悲鳴を上げて助けを求めるのではなく、むしろ、感謝を捧げたと言う。

(4) これらから、彼がその態度においても、内容においても、この緊急時に、いつもと全く同じように祈り、ふるまっていたことが分かる。

8. これが彼の神の前の誠実さである。

(1) 多くの人々が、時と共に変わってしまう(昔は熱心だったのに、今は・・・となる)。

(2) 多くの人々が、事情の変化と共に、事情を優先にして、自分に都合の良いように、自分の損得に合わせて、神様に対する態度を変える。

(3) しかしダニエルは違った。即ちこの緊急時、非常事態に、いつものように、as he had done before これまでしてきたのと同じように、変わらずに彼は生きたのであった。

(4) 正に、詩篇 15 篇 4 節の実践である。

(5) この彼が変わらない信仰の在り方、生き様は、王がすでによく知り、認め、敬服、尊敬していた事実であった。そのことを 6 章 16 節、20 節にある王の言葉で見たい。日本語訳では、「あなたがいつも仕えている神」英訳、原語で見ると、“God whom you always/continually/constantly serve” とある。

(5) どんな時も、いつも変わらない、日頃からの誠実な歩みこそが、クリスチャン生活と人生の強さの秘訣である。その変わらない証しこそが、インパクトある証しのかである。

結 論

- 私の最も尊敬するクリスチャンは、歴史上の人物であるが、1800 年代後半から 1900 年代初頭に中国で宣教師として働いた英国人宣教師ハドソン・テラーであるが、私がケンタッキーの神学校で学んでいたとき、彼から言うと 4 世?、彼の末裔になる青年に会い、交わる時が与えられた。
- 「あなたが先祖から受け継いだ信仰の遺産は何だと思うか?」の質問に、彼は、神と人、双方の「忠実さ・誠実さ」(Faithfulness)であると彼は答えた。ここに宣教と証の力の原点がある。
- 聖霊を求め満たされて、変わらない心、神様への誠実・忠実な心を頂きましょう(詩篇 51 篇 10 節)。